

大学教育に必須の「書く力と考える力」を、小論文で吟味

—— 岐阜大学地域科学部の小論文

入試小論文を読んでいると、深い学びや気づきもたらされる、優れた出題に出会うことがある。岐阜大学地域科学部は、そのような良問を出題し続けてきた学部の一つである。全国で初めての地域系学部として、どのような教育を行い、入試小論文にどのような意図を込めてきたのか、先生方の声をレポートした。



▲右から順に、岐阜大学地域科学部 洞澤伸 学部長、和佐田裕昭 副学部長、橋本智裕 准教授、内田勝 副学部長、稲生勝 教授。（撮影は7月末）

「私たちは学部開設以来、入試における小論文を非常に重視してきました。書く力、ものを考える力は大学入学後の教育につながりますし、大学卒業後もずっと自分自身に向き合い、内省することにつながります」。

岐阜大学地域科学部学部長の洞澤伸教授（専門は社会言語科学）は取材の冒頭、こう切り出した。「自分の考えをまとめて表現する、何か資料を集めて分析して表現するというのは、次の段階への思考や具体的な行動へつながっていくものです。い

わば書く力は自己実現への能力であり、自分の人生を切り拓いていくための基本的な能力だと考えています」。

地域系学部の先駆者

平成8年（1996年）に、全国初の地域系学部として開設した岐阜大学地域科学部は、地域をキーワードに、様々な社会的、文化的な課題について「総合的に探究する能力」の涵養を目指してきた。教養部が母体だったこともあり、扱う対象は人文・社会・自然科学の幅広い学問だ。副学部長の内田勝教授（専門は18世紀英文学）は「当初は文学や法学、経済学、自然科学が中心でしたが、だんだんこれなれて学問領域が広がっています」と語る。2年次からは学生は希望に応じて「地域政策学科」もしくは「地域文化学科」を選ぶ。地域政策学科では「産業・まちづくり系統」「自治政策系統」「環境政策系統」に、地域文化学科は「生活・社会系統」「人間・文化系統」に履修系統が分かれる。これら地域科学部の特色の一

つが、少人数でのゼミナール教育。稲生勝教授（専門は科学哲学）は「初年次セミナーで文学や哲学、経済学などの導入を学んだ後、基礎セミナーと2年前半の研究室訪問を経て、専門セミナーに入り、卒業論文を書きます。相当深く勉強できます」と説明する。専門セミナーの定員は1学年4人と少数精鋭だが、大学院生もおり、他のゼミナールや他大学との合同ゼミもある。そして地域科学の要となるのが、地域で様々な課題を学ぶ「社会活動演習」（1年）や「地域学実習」（3年）の演習・実習系科目だ。加えて副学部長の和佐田裕昭教授（専門は量子化学）は「近年は在日外国人の増加もあり、地域自体が国際化しています。そこで平成28年（2016年）に『国際教養コース』を設け、令和2年から『国際教養プログラム』に発展的に改組しました」と語るように、海外の学術協定大学へ1年間留学し、4年間で卒業できるプログラムもある。今はコロナ禍収束後の再開に向け、学生は待機中だ。

「書くこと」は学部教育の軸

地域科学部の授業では、「文章を書く」場面が非常に多い。入試委員の橋本智裕准教授（専門は理論化学）は「入試で書く力を重視するのは、大学教育を受ける過程で必然的に必要な能力であるためです」と説明する。稲生教授も「この学部の中心となるゼミナール教育では、勉強したことを発表して教員や学生と議論します。そのためには、自分が考えたこともないような文章を読んで自分はどう考えるのかを書くことが極めて重要だと考えています」と付け加えた。

- 資料① 地域科学部の「求める学生像」
1. 人間社会の営みや自然との関わりに深い関心を持っている。
 2. 物事をさまざまな視点から総合的かつ論理的に考えることができる。
 3. 自ら課題を見つけ、その課題に対して積極的に取り組もうとする意欲を持っている。
 4. 他者の考えをよく理解し、自己の意見を表現する能力を持っている。
 5. 幅広い学問分野を学びながら、自己の専門分野を次第に決定してゆきたいという意欲を持っている。

（岐阜大学地域科学部アドミッション・ポリシーより）

例えば1年生の必修科目「地域研究入門」では、学部の専門分野の多様性と関連性、一つのテーマを多角的にアプローチすることを学ぶ。その中で内田教授を含むグループが担当するのが「まちを歩く／まちを読む」。「デパートの起源から文化の大眾化を考える」「岐阜の街の魅力を歩いて探る」など、講義やフィールドワーク、推薦図書に基づくワークショップなど多彩だ。

この授業の成績評価は「全13回の授業で毎回提出するコメント用紙」（A5程度）50%、「テーマごとの小レポート（小テーマ4回目の後、A4一枚程度で提出）」30%、「書評レポート」20%というように「書くこと」を基本とする。その到達度評価は「講義や推薦図書の内容の要点を把握する能力」「講義や推薦図書の内容に関する自分の意見を、根拠を挙げて論理的に述べられる能力」であり、まさに小論文で問われる能力と一致する。

さらに先生方が異口同音に「極めて重要」と語ったのが、A4一枚の「志望理由書」だ。

これは基礎セミナー、専門セミナー、社会活動演習、地域学実習の選択時に提出するもの。稲生教授は「志望理由書を書くことで自分自身が曖昧に思っていたことがはっきりできる点が大きなポイントです」と語る。1年間の導入教育の後、教員の研究室を自由に訪問して内容を熟考した後にはゼミが選べる点で、「学生に寄り添った進路指導」（稲生教授）が目指されている。

テーマは大学での学びに直結

それでは入試を見る。まず一般選抜は大学入学共通テストに加えて、個別学力試験の前期日程では「数学または外国語」（200点）と「小論文」（200点）、後期日程では「小論文」（300点）を課している。また学校推薦型選抜Ⅰ（大学入学共通テストを課さない選抜）でも、小論文を課す。

資料①は地域科学部の「求める学生像」（アドミッション・ポリシー）である。「人間社会の営みや自然との関わりに深い関心を持っている」「物事をさま

ざまな視点から総合的かつ論理的に考えることができる」など5つの学生像が示されている。

「ある高校の先生から『どの学生像を最も重視していますか？』と問われ、『これらは互いに密接に関連し合っており、不可分です。一見、それぞれ別物に見えますが、その根底にあるものは同一です。それは、物事を論理的に考え、自分の考えを表現するという能力です』と申し上げました。本学部の入試科目で小論文を課すのは、そうした能力を備えた学生を受け入れるためなのです」と洞澤教授。

さらに「書く力は内省による自己表現から次の段階の発展的な思考と具体的な行動へとつなげることができるとおりであり、それは入学後の学修に直結するものなのです（洞澤教授）」と、学びへの主体性を見る意味もある。

これまで地域科学部で出題されてきた小論文のテーマは、地域・社会・人間・環境などに関する社会問題だ。「いずれも学部教育で扱うテーマです」と稲生教授は説明している。

弱い、構造的な見方と批判力

実際に令和3年度一般入試前期日程の小論文を見てみよう。

資料②には設問と【出題意図】がまとめてある。例年バランスを考慮しつつ、大問2題が出題される。Ⅰは柳美里の『国家への道順』（河出書房新社）、Ⅱはラース・スヴェンセン（小須田

健訳）『働くことの哲学』（紀伊國屋書店）からの出題だった。このうちⅠの課題文の内容は以下のとおりである。

「わたしは『国家』という言葉に違和感を持っている。日本の一部しか知らず、わたしが韓国籍であるためである。」

「国家」の輪郭が浮かび上がるのは戦争時であり、その国の

国籍を有していない人は「国家」から弾かれる。そのため、わたしはオリンピックが苦手だ。なぜなら今の五輪は国家発揚の熾烈なメダル争いの場であり、歴史問題や領土問題で争う国同士は国民感情に火がつき、相手国選手へのバッシングやヘイトスピーチが横行するためである。人は家路への道順をわざわざ

尋ねない。国家への道順は？」

「国家」の狭間で違和感と疎外感を抱いてきた筆者の心情が抑制の効いた語り口で吐露され、文学の力を感じさせる文章だ。オリンピック開催年の今春の出題で、タイムリーなテーマである。

設問は問1が筆者が下線部「『日本に帰りました』とは言えない」と考える理由を、筆者の立場と国家観を考慮に入れたうえで、本文に即して150字程度で答えるというもの。筆者が「国家」「日本」という言葉に抱

資料② 地域科学部の令和3年度一般入試前期日程の小論文の出題と出題意図

Ⅰ 以下の文章は、柳美里『国家への道順』（河出書房新社、2017年、一部改変）の一部です。この文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

問1. 筆者が、下線部「『日本に帰りました』とは言えない」と考えるのはなぜか。筆者の立場と国家観を考慮に入れたうえで、本文の内容に即して150字程度で答えなさい。

問2. 本文中で筆者が、波線部「オリンピックが苦手です」と述べる理由についてまとめたいうえで、それを踏まえ、あなたのオリンピックに対する考えを400字程度で述べなさい。

【出題意図】

問1. 筆者は、日本で生まれ育ち、日本で暮らす一方で、外国籍を有している。本文から、このような筆者の立場と国家観についての読解力を試す問いである。

問2. 筆者は、現在のオリンピックが、世界中の青年の友好を深める初期の理念から外れてしまい、国威発揚の舞台となってしまった結果、国を挙げてのメダル争いが熾烈になり、国民感情に火がつき、相手国へのヘイトスピーチにつながるために、オリンピックが苦手だと考えている。この点を踏まえて、本問の後半部分では、オリンピックに対する賛否の見解を、合理的な根拠をもって、説得的に述べることでできているかを問う。考慮に入れることが想定される事項としては、たとえば、ナショナリズムについての立場、開発主義に対する是非、「復興五輪」という言説の可否などが考えられる。

Ⅱ 以下の文章は、ラース・スヴェンセン（小須田健訳）『働くことの哲学』（紀伊國屋書店、2016年、一部改変）の一部です。この文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

問1. 下線部のようにするのはなぜか。50字程度で説明しなさい。

問2. 休日とは、本来「無為」に過ごしてもいいものであるが、現代社会では、余暇におけるレジャーの「仕事化」が進んでいる。その理由を本文の内容に即して100字程度で説明しなさい。

問3. 日本では、過労死や過労自殺が深刻な社会問題になってきたが、本文の内容を踏まえたうえで、「退屈」という観点から働きすぎが生じる理由を400字程度で説明しなさい。

【出題意図】

問1. 労働と休日の「相補関係」に関する読解力と想像力を問う。

問2. 休日とは本来、リラックスするものであるが、休暇にも市場や効率の原理が入り込み、生活様式が変化している様を考察する能力と、現代社会の変化をグローバルな規模から俯瞰する能力を問う。

問3. 働き過ぎ、という現象を企業社会の論理から説明するのではなく、その外側に位置する「退屈に耐えられない」という視点から説明する能力を問う。すなわち、常識的な考え方に囚われず、視点を変えて現象を捉え直す能力を問う。

造的な見方や批判的な見方が弱く、評価しにくい部分があったと聞いています」と語る。稲生教授も「以前から受験生の答案を読んでいますが、批判的な観点でものを見ることが意識しないで来てしまった印象があります。世間の表層的なものを見方を疑問を持たずに受け入れてしまっているため、それらと違う見方が示されると理解できない。読書不足が影響しています。もう少し違ったものの見方をしてほしいですね」と指摘した。

ちなみに後期試験では、村上陽一郎著『コロナ後の世界を生きる―私たちの提言』（岩波新書）を出題。その中に「新型コロナウイルス感染者数」（死者数）の図表も示され、「感染者数の多い国の政治的・社会的・経済的問題を考察させる」という出題がなされていた。「コロナ禍の背景や状況に対してインターネットや新聞の情報をただ並べるだけの答案も散見されました」と稲生教授。また和佐田教授は「データの読み取りが不十分だと感じます。データをグラフ化

すると一定の傾向が出ます。それらを常識的な観点で読み取って論理構成して文章にできるようになってほしい」と語った。新学習指導要領では資料の活用が重視される。資料の的確な読取りと、その社会的背景などを、高校でも扱う必要がある。高校1年から新書を読む。それでは小論文を書く力をつけるために必要なことは何か。まず稲生教授は「私は高校生に『書く練習ばかりではなく、読む練習をしてきてね、できなかぎりたくさん本を読んできてね』と言います。特に高校1・2年でたくさん読んでほしい。また本があまり好きでない生徒は1週間に5分でもいいので、図書室を回ってみてください。『自分を読んで』という本に出会えます。大切なのは自分に関心のある分野をどんどん読むこと。そこから広げていくことが良いと思います」とアドバイスする。また内田教授は「初年次セミナーで『扱ってほしいノンフィクション』のアンケートを取る

と、ほぼ全員がフィクションを挙げてきます。新書を読んだ経験のない学生もいます。高校でぜひノンフィクションを読んで下さい」と語る。内田教授の勧めは新書マップ（<https://www.shinshomaps.info/>）というウェブサイト。高校生も利用できる。ただし受験期の3年生は余裕がない。そこで稲生教授は「NHKスペシャルやNNNDキュメントなど社会問題を扱うドキュメント番組を、食事を摂りながらでもよいので視聴するとよいでしょう」と語っていた。

*